

大谷天満宮本殿はどこにあったのか！

●山形県の大沼浮島の下流に気になる小さな集落がある。朝日町大谷。なにしろここは、菅原道真の子孫たちが住む郷である。道真が太宰府に左遷された折に、たくさんいた側室たちは東北へ流された。大谷には親族や仕える者たちも含む一族郎党 20 世帯の移住だったらしい。以前に京都の北野天満宮を訪ねた際に元宮司さんとお話する機会があったが、東北の道真伝説が残る地なら、ほぼ間違いなく側室一族が移り住んだ場所と言えるそうだ。



道真は時の右大臣であり、天穗日命の後裔 野見宿禰を祖とする祭祀一族だったと云われている。また、大谷の見学会に参加した折に教えてもらったが、道真の子孫の白田家は、幕末までは神楽殿や仁王門、そして一間四面の境内社を九つ持つ「大谷天満宮（西野天満宮・西の天神）」の神官一族だったという。残念なことに幕末に火事になり再建できずに、村社の白山神社に合祀された。焼け残った仁王門は隣の永林寺に移築されたが、体内から出てきた祈願書によると京都の名のある仏師の作であることがわかった。また焼け残った境内社の一つは隣町の熊野神社（大江町本郷）の本殿としてそのまま使われている。見学会ではそこも見えてきたが、四面に施された木彫りの装飾は見事だった。そのような大きくて豪華な境内社が九つもあったということになる。



大谷の集落は風水に基づき碁盤の目とまではいかないが小京都に似た作りとなっている。通常の山村部なら平らな場所には田畑を作り、家は山の際などに建てられるが大谷は平らな場所に住宅がある。驚くのは、二百戸ほどの小さな集落に四つの天神があり大谷四天神と呼ばれている。さらに徳川幕府の直轄地である御朱印寺社が九つあり、そのうちの大谷天満宮、白山神社、日月神社は平安時代創建らしい。幕末までは、白田家に京都土御門家に定期的に通う陰陽師や神事のための公式な相撲行司もいたらしい。詳しくはあさひまちエコミュージアムのホームページや資料、町の図書館で「大谷郷」など大谷に関わる本で読むことができる。大谷は特異な村であり、道真一族が移り住んだ歴史もうなずけてくる。

この道真一族が大谷に移り住んだ理由は、これまでの祭祀線で調べ上げたとおり、縄文・出雲族の東日本最大の聖地大朝日岳、後の「朝日嶽信仰」の拠点だった「大沼」がすぐ上流部にあるからだろう。実際、白田家の初代分家は大沼地区で宿坊を開いていたという。

■大谷天満宮（西野天神・天神社）

石高 24 石 6 斗 4 升 天満宮・熊野宮

境内 2509 坪、本社 3.5×6 間、拝殿 2.5 間、末社祭神 9 座（何れも 1 間 4 面/風神宮、雷神宮、火雷新宮、十六万八千眷属宮、大黒明神社、稲荷社、荒神新山権現、宮主社）、神楽殿 9 尺四方、仁王門 2×3.5 間、花表 9 尺 神主/白田下記 神主屋敷 2900 坪、お玉屋 1 間 4 面、行事殿 2.5 間 4 面、書院 3.5×7 間、居宅 6×17 間、門 9 尺×3 間
(文政 7 年 (1824) 大谷村明細書上帖より)

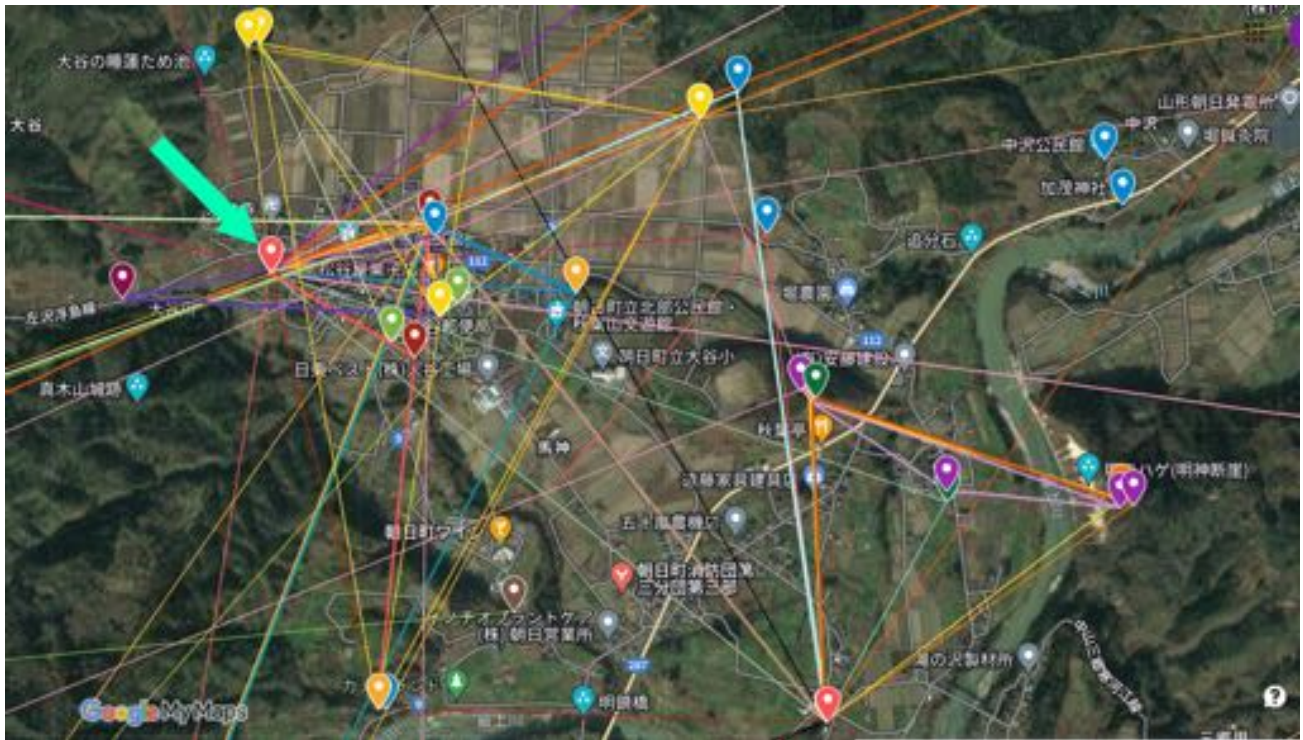
※文久3年3月晦日（1863）仁王門、境内社一つを残し全焼。再建不能。後年仁王門は永林寺に移転。境内社は大江町柳川の熊野神社本殿に使用。

●さて、気になるのは、この大谷天満宮がどこにあったかである。本殿の位置がわからなければ祭祀線も調べられない。現在の白山神社が戦後 GHQ により学校の隣にあることを理由に解体させられ現在地に移転したが、ここに大谷天満宮があったとされている。ただ、現在の白山神社には九つの境内社や神楽殿を配置できる広さはない。天満宮は2500坪の境内だったらしいので本殿はもっと東側の別の場所にあったと思われる。グーグルの写真地図をじっと眺めてみた。白山神社跡にも、永林寺にも真っ直ぐの参道がある。900年近く存在した神社なら参道が残っているはず。



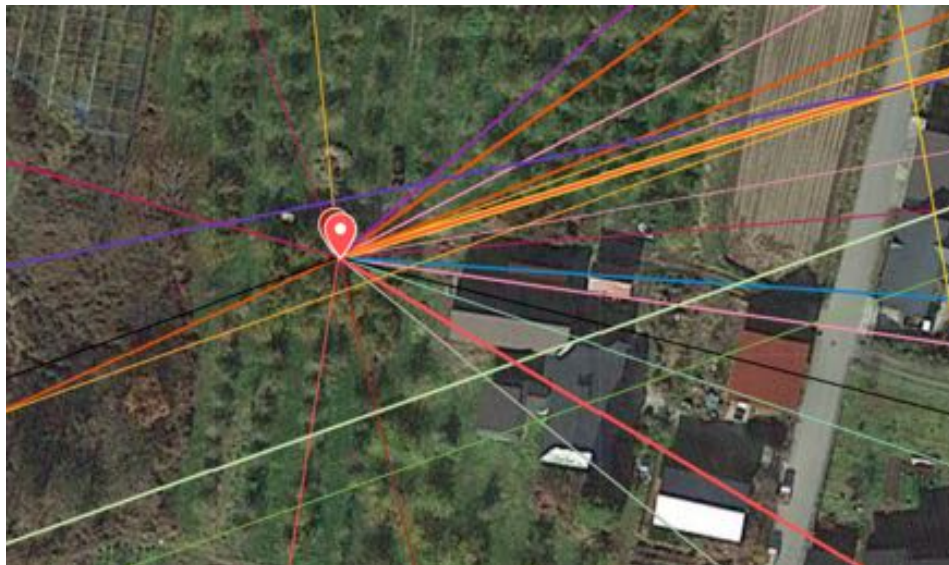
県道112号左沢浮島線は40年前まではなかった

●参道らしき一本の細い道が気になった。T字路にぶつかっている。その道の始まりは東にある二渡観音でここから北に位置する白山神社の参道にもなっている。昔村役場があったそうなので中心的な場所と言える。そこから二つの神社に行く道が伸びている。おそらくそのT字路の先に天満宮があったのだろう。あとは、他の神社からの祭祀線がぶつかる場所を探せば、本殿の位置も割り出せるはず。大谷地区や近隣の神社をすべてグーグル地図にチェックし、以前に調べていた祭祀線も含めあらためてコンパスを置いてみた。すると…



●やはり大谷は祭祀族が移り住んだ地であることは否めない。祭祀線だらけで全てを調べるのは困難なほど多過ぎる。いずれテーマごとに大谷の祭祀線を紹介したいと思っている。

●そして、大谷天神宮の本殿場所が簡単に見つかった。やはりあの T 字路の先に、ピンポイントでたくさんの祭祀線がぶつかってきた。住宅地図で確認すると、まさに白田さんというお宅の裏。リング園の中に、そこだけ林になっているように見える。きっと印の石や記念樹が植えてあるのではないだろうか。



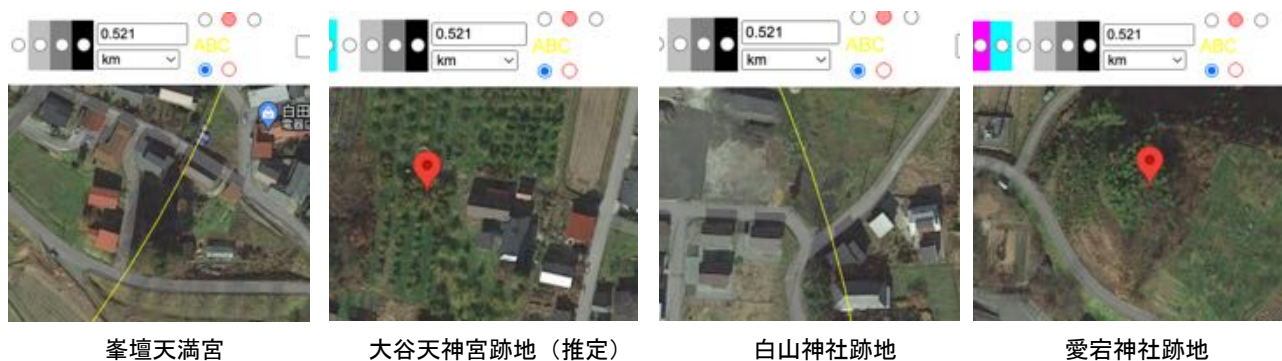
●大谷天満宮の祭祀線を調べるにあたり有力な手がかりはたくさんある。まず、大谷村内の平安時代創建の神社である白山神社と日月神社とのつながり。日月神社の伝説では、白山姫と男神の光が二つ落ちたとあり、大谷の白山神社の末社となっている。また、焼け残った境内社の一つが隣町の大江町の熊野神社の本殿として使われていること。さらに、天満宮の白田神官と東根市の若宮八幡宮の三浦神官と密接なつながりがあった歴史。そして最大聖地の大朝日岳そして浮島の大沼とのつながり。一つずつ紹介してみる。

白山神社とのつながり



■大谷天満宮 ←←←521m←←← 白山神社跡地 ←←←521m←←← 愛宕神社跡地

■峯壇天満宮 ←←←521m←←← 大谷天満宮 ←←←521m←←← 白山神社跡地



峯壇天満宮

大谷天神宮跡地（推定）

白山神社跡地

愛宕神社跡地

●521m で四つの神社がつながり、きれいな二つの三角ができた。峯壇天満宮は移築したらしいので、もしかしたらもう 50m ほど北東にあったのではないだろうか。すると東西南北きれいな菱形で大谷は護られていたことになる。いずれ峯壇天満宮の跡地も特定してみようと思う。

■白山神社

祭神 菊理姫命 伊邪那岐命 伊邪那美命 与茂津言解之男命

境内社 稲荷社 末社 日月社（船渡）

例祭 七月十七日

大谷の白山神社は承和七年（八四〇）、加賀の国（石川県）の白山大権現より勧請し、天喜年中（一〇五三～一〇五七）に源頼義が武運長久を祈願したと伝わる。昔からいくさの神として領主の崇敬厚く、特に寒河江の大江氏や山形城主の最上氏より十九石四斗余の社領を寄進され、さらに慶安二年（一六四九）徳川三代將軍家光より、石高同じく、朱印状（徳川將軍が朱印を押して発行した公文書）をもって安



堵されたのである。

宝永四年（一七〇七）近郷九か村（大谷、大暮山、川通、栗木沢、船渡、左中、粧坂、中沢、富沢）の総鎮守として、各村々から寄進を受け、白山神社を再建した記録が残っている。

江戸時代、白山神社の西側朱印地に寺を建て白山寺と称し、真言宗寒河江惣持寺の末寺となったが、天保時代（一八三〇～一八四三）に廃寺となり、跡地は畑になったといわれている。この場所に明治十二年（一八七九）大谷小学校が初めて建設されたのである。

明治七年官令により村内の御朱印社であった天満宮、八幡神社、愛宕神社、北野天神社、若宮八幡神社、二渡宮、日光神社を白山神社に合祀。

もとの白山神社は、旧大谷小学校の東側にあり、境内は広く、モミの木や杉、かえで、桜などの大木が茂り、千百年余の間、氏神として親しまれてきたのであった。しかし、終戦後、昭和二十一年（一九四六）五月、進駐軍（GHQ）より、大谷小学校と隣接する白山神社を教育施設より切り離すよう命令され、止むなく社殿を解体、恩賜郷倉（非常時の米倉）に一時保管。昭和二十五年（一九五〇）八月三十日、現在地に茅葺き屋根を銅板葺に変え昔のままの立派な社殿を再建したのである。当日深夜、松明の先導で別当南蔵院（小野家）より新殿に遷宮したと伝えられている。

跡地には、新制の大谷中学校が建設され、今も残るヒバの木は、白山神社本殿跡に植えられた記念樹である。

西村山郡朝日町大谷 738-1

●江戸期の白山権現社領 石高 19 石 4 斗 別当南蔵院 社地 775 坪 本社 2.5 間×2 間、拝殿 3 間×2 間、鐘楼 1.5 間×1.5 間 通夜寮 3 間×2 間、鳥居 明 9 尺 ●白山寺 1152 坪 寺 11 間×5 間 東照権現御宮 1×1 間（文政 7 年（1824）大谷村明細書上帖より）

※天保の頃解体、明治 9 年大谷小学校跡地となる。

■峯壇天満宮

創建や由来についての資料もなく伝承もされていないが、お堂に納められている 3 枚の祈願札によれば、祭主は白山寺宝印宥天、祭施主は白田九兵衛延信と記されている。白山神社との関係があるものと推察される。昔は大きな鳥居があったといわれ、それに懸けてあったのだろう、立派な彫刻の額がお堂に納められている。



■愛宕神社跡

御朱印社、6 石 1 斗、社中 4495 坪 本社拝殿共 17 坪 お玉屋 1 坪 稲荷社 1 坪 十二神社 4 坪、通夜所 6 坪、鳥居 明 9 尺 神主屋敷 175 坪 （文政 7 年（1824）大谷村明細書上帖より）

日月神社とのつながり

■大谷天満宮 ←←←2.235km←←← 日月神社 →→→ 2.235km →→→ 真中稲荷神社



■日月神社

今から千年ほどさかのぼる承和七年（840）、田原家屋敷内での出来事である。天にわかには鳴動し、あたかも雷電（いなづま）のような響きをなし、四方八方に光を放ち、燦然と輝いた太陽と月のような二つの火の玉が飛来してきた。みんながいうには、白山姫とその姫を乗せてきた老翁の化身だとか。そんなことがあってから、田原家ではこの聖地に日月神社を建て手厚く祀ってきた。日月神社と深い因縁がある大谷の白山神社も承和七年（840）、加賀の国白山権現から分神したと伝えられていて、その末社として、日月神社を創建したといわれている。一乗院田原家は代々日月神社の別当職をつとめ。系図上では現当主で二十二代にあたる。江戸時代には大谷の南蔵院と共に白山神社の社人として、十九石余の御朱印地を持つ格式高い家柄であった。現在の社殿は元文三年（1738）に再建、祭日は旧暦三月十日となっている。

※『大谷郷』より抜粋

●地元の人に聞いて行ってみたが残念ながら社殿は崩れ落ちて見る影もなかった。

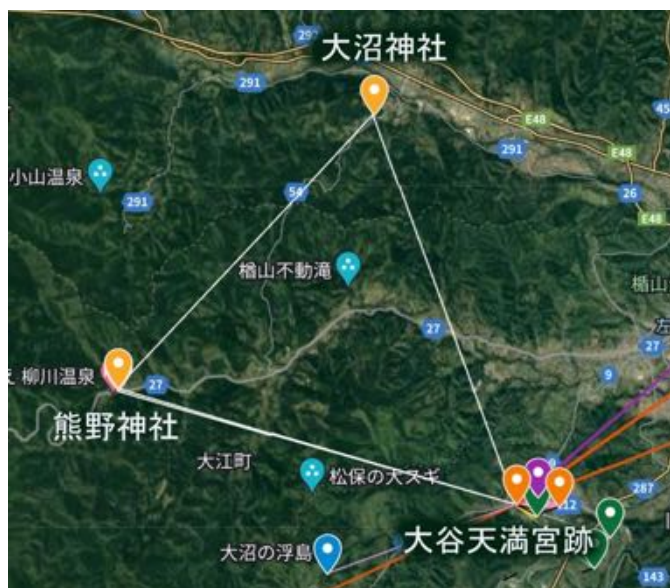
■真中 稲荷大明神社

創建不詳だが、そばの昌城院に伝わる起源などから推察すると、今から400年ほど前だろう。

心鏡（しんけい）上人は、断崖頂上の明神と稲荷明神の間に黄金の橋が架かり明神が仲良く遊んでいる神秘的光景を見て、「この地こそとどまるべき」と決めたと伝わります。境内に江戸大火の火を消すために水をかけたと伝わる“男石・女石”もあります。心鏡上人は、大井沢大日寺中興の祖と謳われた道智上人の弟。文禄三年（1594）開創。本尊/地蔵菩薩 真言宗智山派 ※『大谷郷』より抜粋



熊野神社（大江町柳川）とのつながり



■熊野神社 ←←← 9.320km ←←← 大谷天満宮 →→→ 9.320km →→→ 大沼神社

■熊野神社大ケヤキ（ご神木） ←←← 9.320km ←←← 大谷天満宮 →→→ 9.320km →→→ 大沼神社



●大谷天満宮の焼け残った境内社が本殿に使用されている熊野神社。ぶじ、西川町長沼の大沼神社がぶつかった。浮島の大沼と同じ大沼なので気になり行ったことがあるが、中島に奥の院があり正に浮島の大沼と似せた作りとなっている。立派な社殿があって浮島の大沼以上に立派な作りだ。

●「名字由来 net」という地区ごとに特定の名字の人が何人いるかを探せる素晴らしいサイトを見つけた。さっそく、白田姓の人がいないか長沼地区を調べたらおよそ 10 人いらした。やはり、白田神官一族はここにも移り住んでいる。白田姓は全国で朝日町が最も多いので少なくとも山形県内の白田さんは大谷出身と言えるのではないかな。ちなみに朝日町にはおよそ 500 人、大谷を含む北部地区で 360 人、大谷地区は 280 人、大沼地区には 30 人いらしゃる。山形県内では、やはり西川町は 200 人がダントツで多い。山形市や寒河江市、天童市も多いが過疎化している朝日町から近い都市部なので近年移り住んだ人が多いと思われる。

■熊野神社

祭神 伊邪那岐尊 伊邪那美尊

祭日 9月19日

承平年中（921～938）青柳村に優姿塞宝泉という者があり、紀伊熊野大神を崇敬し遠路参詣すること二十一回、年老いて血氣衰え参詣できず、少し仮寝の間大神が夢の中に「汝精誠である。二世の懇願速やかになるだろう」と勅宣があり、宝泉夢から覚めて感涙し、日を重ねて郷里に帰り朝夕の謹行怠らずいる時、夢のように幻のように空中に声があり「迺乃沢大里の辺必ず瑞がある」との神勅があつて、宝泉が直ちに行くと石の上に紀州熊野の宝印及び柳葉一葉があつた。宝泉は、これは熊野権現の影向であると社を建てこれを祭鎮した。天徳年中（951～957）当国守護修理大夫当社に祈願するに感応著明であつた。

別当定宝院・大宝院で支配し代々修行を以て奉仕し、大江氏・最上氏の崇敬厚く二十石三斗四升の社領を寄進し、徳川氏も元の如く朱印を以て寄進した。享保四年（1719）社殿を再建、**明治二年の火災で類焼し大谷村天満神社の神殿を護り受け再建し**、明治四年熊野大権現を熊野神社と改め、明治七年村社となり、昭和三十二年に本殿を移築し拝殿を新築した。

西村山郡大江町柳川 1592



■熊野神社の大ケヤキ（ご神木）

道路を挟んだ月布川の縁にある。紀伊熊野大神を二十一回参詣した宝泉が植えたと伝わるので樹齢は一千年以上。



■大沼神社

祭神 天之水分神、火産霊命、大山祇命、奥津彦名命、奥津比賣命

詳細不明だが御明神様と称して養蚕の守護神であり、昔日は蚕の掃立前や、また日・干・時に近郷村民が雨乞いを祈願すると必ず降雨の靈験があるので参詣に来るものが多かったという。

西村山郡西川町沼山林中 982 番ノ 5



湖畔の拝殿



中島の奥の院

東根若宮八幡神社とのつながり

●『大谷風神祭』の小冊子に、パネルディスカッションの質疑応答の記録が載っており、とても興味深いやりとりがあったので貼り付けておく。大谷には幕末の大谷天満宮と東根の若宮八幡神社の宮司が戊辰戦争の折に庄内軍と戦おうと決起したものの、捕えられ二人揃って打首にされた歴史がある。

■白田進さん（質問）

菊地先生にお尋ねします。永林寺の三浦蔵人のお墓見てきたと聞きましたが、大谷はもともと官軍の地なんです。それで庄内藩がある時点において賊軍だったもんだから、白田外記は庄内藩につかまって首を討たれたってことです。私の父がよく言っていたことがありました。一緒に打ち首になった東根の若宮八幡の宮司の息子さんが三浦蔵人さんなので、東根と大谷は繋がりがあったんじゃないかと。

■菊地（菊池和博氏（東北文教短期大学教授））

おっしゃるとおりです。三浦家は若宮八幡神社の代々の宮司で、蔵人も幕末の神主です。白田外記も天満宮の宮司。同じ官軍側の新しい時代を開こうとして、気持ちが一緒だったんでしょうかね。庄内軍に捕まえられて、寒河江川の臥龍橋近くの川原で首討たれたという、これは歴史的事実ですね。永林寺に二つ碑が並んで眠っているということで、私と皆様はそういう意味でも繋がっているのですよね。田楽提灯の行列が双方の神社で行われているというのもその縁かも知れません。東根と大谷、歴史を遡るとこんな因縁というか、縁があるということだと思います。



■東根若宮八幡神社 ←←← 24.208km ←←← 大谷天満宮跡 →→→ 24.208km →→→ 立石寺奥の院

■東根若宮八幡神社 ←←← 16.830km ←←← 平塩お塞神 →→→ 16.830km →→→ 立石寺大仏殿

黒漆塗（一部朱漆塗）、扉、高欄、斗?、格狭間などには金箔装飾、鎌倉時代の数少ない神輿の遺構で意匠的にも優れていることから昭和30年（1955）に山形県指定有形文化財に指定されています。

例祭（風よけの祭り）で奉納される太々神楽は天保6年（1835）から続けられ、古式を現在に伝える貴重な神事として昭和43年（1968）に東根市無形文化財に指定されています。祭神：應神天皇、仁徳天皇。旧社格：郷社。

東根市本丸北2丁目3-1

■平塩の御塞神祭り

今からおよそ1300年前の養老5年に開かれたという平塩熊野神社があります。平塩の御塞神（おさいじん）さまは、この熊野神社の参道の東端、鳥居崎にあります。昔は村はずれだったのでしょう。この神様はもともと熊野神社の一山衆である松本坊の受け持ちでした。



「塞の神（さいのかみ）」とは、村はずれの道ばたなどにあって旅行の安全を守り、外から入ってくる疫病や悪霊を防ぐ神様です。ご神体は男性や女性の象徴と似た形の石などで、縁結びや子宝を授けてくれる神様にもなっています。信州（長野県）の道祖神なども同じ種類の神様です。

旧暦の小正月（1月15日）、この平塩の御塞神様祭りが行われます。地区の人たちは、自分の家で作った甘酒を塞の神にかけて豊作を祈りました。また、早朝に一山の男衆が経塚山から松の木を伐ってきて、男根に似せたご神体を作ります。大きいものは40センチメートルもの長さがあります。

夕刻、身体を净め白装束姿で熊野神社の階段を上って行きます。神社で祈祷をして松の木で作ったご神体に魂を入れるのです。その後太鼓の合図で一山の人たちは、手にご神体を持ち「ホーイ、ホイ」と掛け声をかけながら参道の先の御塞神様まで下ります。そして塞の神の神前にご神体をならべ、宮司が祝詞をあげます。

そして、いよいよご神体がまかれるのです。夜も更けて極寒のなか、数百人も集まった群衆に向かって、神主が「まくぞー」と掛け声をかけてご神体を次々放り投げます。人々は福を求め、奪い合ってご神体を拾おうとします。一度手に入れた人にさらに何人も襲いかかり、激しい争奪戦となるのです。これを拾うと子孫繁栄や悪霊退散の御利益があるといわれています。



●ちなみに若宮八幡宮は、大谷そして大沼浮島さらに大朝日岳を向いている。元々は若宮八幡神社も大朝日嶽修験だったのだろう。しかし、その影は鎌倉時代の北条執権時頼の「大朝日嶽修験一千年封じ」により見えなくなってしまったのだろう。天気の良い日は、きっと若宮八幡神社から大朝日岳を望めるのではないか。

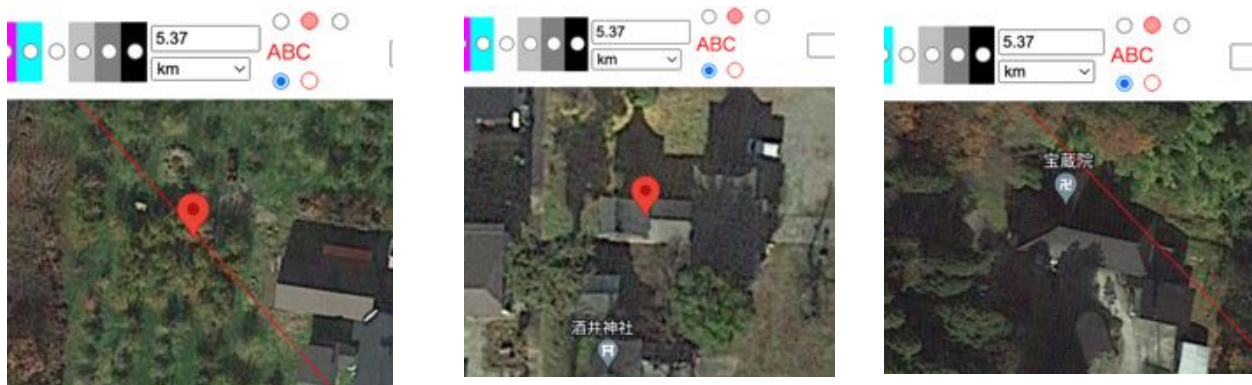


大江町八幡神社とのつながり

●隣の大江町の中心地左沢の八幡神社とのつながりも見つけたので記録しておく。この宮司さんも白田姓でお墓参りは大谷と大沼に行くとお聞きしたことがあった。

■大谷天神宮 ←←← 5.37km ←←← 左沢八幡神社 →→→ 5.37km →→→ 慈恩寺宝蔵院





■八幡神社 詳細不明 大江町左沢

■慈恩寺宝蔵院

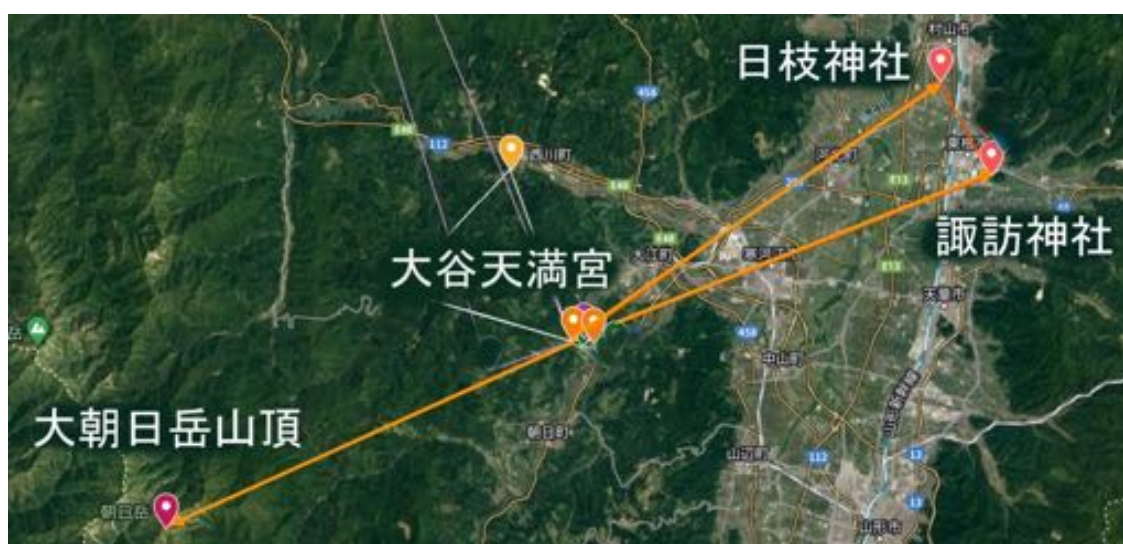
慈恩寺は3ヵ院48坊からなる一山寺院を形成し、鎮護国家、除災招福を祈願する寺院でした。一山を代表する支配職は、真言方は宝蔵院・華蔵院、天台方は最上院の3ヵ院で、所属の院坊をまとめ、幕府など大檀那への年礼を主としました。現在は3ヵ院17坊が一山を支えます。3ヵ院の宝蔵院は真言宗真言方学頭、享保6年の「拝領高并人数帳写」によりますと、配当高109石余。学頭1、衆徒11院坊、家来8、借地6、102軒ほか末寺、本道寺・大日寺など21。胎蔵界大日如来坐像・金剛界大日如来坐像・不動明王多数・千手観音立像・地藏菩薩立像・軍荼利明王立像・竹内坊文書などを保有。

大朝日岳とのつながり

●出雲族は昇る太陽を遥拝していた地に「朝日」と名前を付けていたらしい。朝日嶽修験があった大朝日岳の神気は出雲族の神社作りに大いに利用されていた。菅原一族が大谷に住み着いたのもそれが理由のはず。コンパスを置いてみると、また東根市の日枝神社とつながった。猿田彦神は出雲族の太陽神であるからつながって当然。さらに10mの誤差は出てしまったが同じ東根市の諏訪神社ともつながった。大朝日岳はかつて諏訪山と呼ばれた時代があったから、きっと関係あるはず。

■大朝日岳山頂 ←←← 22.885km ←← 大谷天神宮 →→ 22.885km →→→ 日枝神社

■ // 大谷天神宮 →→22.865km →→→ 諏訪神社 ※10m 誤差あり





■大朝日岳（朝日連峰）

磐梯朝日国立公園の朝日連峰主峰。『三大実録』には「出羽国の白盤神と須波神に従五位下を授けた」とあり、須波神は朝日岳のことで龍蛇神の諏訪神とされる。大円寺『朝日嶽縁起』（1505年）によると朝日嶽大富権現は、大富権現・女躰権現・子守権現の三处であり、本地佛は、大富権現は弁財天（初頭神は大山祇神）、女躰権現は大日如来（木花咲耶姫命）、子守権現は正観音で大山祇神の娘溝織姫命であるとする。役の小角が出逢った女神は女躰権現。朝日嶽信仰は執権北条時頼（1246～56）によって千年封じされたまま現在に至る。山形県西村山郡朝日町

■日枝神社

古来伊豆の堂と 言われ「伊豆神社」となるのだが、当時の代官根本策馬が祭神を間違って大山咋命と報告したので日枝神社となったと言われている。現在も「伊豆の堂さま」として長瀬地区の村社として信仰を集めている。祭礼は、旧暦の三月九日と九月九日の二回だったが、後に四月九日の一回とした。長瀬に嫁に来た新婚の婦女は、必ず盛装して参拝する習慣があった。礼には長瀬地区に伝わる郷土芸能「長瀬猪子踊り」が奉納されている。旧長瀬村開削の祖、慈覚大師への御礼に奉納したのが始まりだといわれており、一時は中断していたものの、地元の由緒深い郷土芸能を守ろうと地元住民の協力のもと、復活、毎年4月上旬の日枝神社例祭の時に奉納されるようになりました。



東根市長瀬字北方 1512-4

●長源寺：由来・歴史・概要

龍空山桜田院長源寺は正応元年（1288）に開創した浄土宗の寺院で、天台宗の山寺立石寺とは関係が深いとされます。平安時代当時、長瀬地域は湖中だったとされ慈覚大師円仁が立石寺を開山するに当たり、仏の化身と思われる山鹿に導かれ山の山頂から当地を見下ろすと、当地の開発を思いたち大規模な水抜き工事を完遂し肥沃な耕地を造ったとされます。長瀬の住民は円仁と導いた山鹿に感謝し、獅子舞を組織して山寺立石寺に踊りを奉納するようになったと伝えられています。長源寺の本尊である阿弥陀如来像は慈覚大師円仁が自ら彫刻したと伝えられる事から、長瀬猪子踊は長源寺で十念を授かり、南無阿弥陀仏の名号を受け、猪子の頭に精霊を入れてから踊り始め日枝神社に奉納されます。日枝神社は一般的には天台宗寺院の守護神で、浄土宗の当寺とは関係が薄いと思われますが、立石寺の境内には日枝神社が守護神として鎮座している事からも猪子踊りの由来を継承しています。

■諏訪神社

祭神/建御名方神 八坂刀賣神（建御名方神の妃神） 詳細不詳。

東根市東根諏訪森南 1116-3



●現地調査してみると磨崖仏で有名な大森山の西側。境内には大きな岩が鎮座。出雲族の磐座だろうか。左側に境内社も一社あった。木が茂っていて見えなかったが、きっと大朝日岳が見えるはず。大谷を真ん中に通ってほぼ一直線に伸びている。

大沼浮島とのつながり

●最も期待していた大沼浮島の出島とのつながりは、早朝に出張先の鶴岡市のホテルで探していた。双方からの等距離ではまったくどこもぶつからず、あくせくしていたが、ついに超大者とのつながりを見つけた。思わず「えーっ!」と声を上げてしまった。平将門である!

■大沼浮島出島←←← 43.319km ←←← 羽黒山五重塔 →→→ 43.319km →→→ 大谷天満宮



■羽黒山五重塔

□創建伝説

承平年中（931～938）あるいは天慶年中（938～947）平将門建立とされる。また、平将門の娘である如蔵尼が、父が建立の志を果たせずに戦没したので、冥路の障りとならぬようにと念願し、その意志を継いで塔を建てたと伝える。

（以下、Wikipedia より）

山形県にある山岳修験の道場である月山、湯殿山、羽黒山を合わせて出羽三山という。このうち羽黒山には三山の神を祀る三神合祭殿があり、そこへ至る参道の途中、木立の中にこの五重塔が建つ。近くには樹齢 1000 年、樹の周囲 10m の巨杉「爺杉」がある。東北地方では最古の塔といわれ、昭和 41 年（1966 年）に国宝に指定された。塔の所有者は出羽三山神社（月山神社出羽神社湯殿山神社）である。

平安時代中期の承平年間（931 年 - 938 年）平将門の創建と伝えられているが定かではない。現存する塔は、『羽黒山旧記』によれば応安 5 年（1372 年）に羽黒山の別当職大宝寺政氏が再

建したと伝えられる。慶長 13 年（1608 年）には山形藩主最上義光（もがみよしあき）が修理を行ったことが棟札の写しからわかる。この棟札写しによれば、五重塔は応安 2 年（1369 年）に立柱し、永和 3 年（1377 年）に屋上の相輪を上げたという。

塔は総高約 29.2 メートル、塔身高（相輪を除く）は 22.2 メートル。屋根は柿（こけら）葺き、様式は

純和様で、塔身には彩色等を施さない素木の塔である。

明治時代の神仏分離により、神仏習合の形態だった羽黒山は出羽神社（いではじんじゃ）となり、山内の寺院や僧坊はほとんど廃され、取り壊されたが、五重塔は取り壊されずに残された数少ない仏教式建築の1つである。江戸時代は五重塔の周囲には多くの建造物があつたという。

近世までは塔内に聖観音、軍荼利明王、妙見菩薩を安置していたが、神仏分離以後は大国主命を祭神として祀り、出羽三山神社の末社「千憑社（ちよりしゃ）」となっている。

■大沼浮島

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）役の小角（役の証覚・役の行者）が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行なわれた。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼



自由に動く浮島（手前）と出島（奥）

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。しかも波を立てずに動く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富権現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稲荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稲荷よりも古い歴史になってしまう。730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稲荷神に変えたのだと思われる。徐福も連れてきた海童たち（秦族）も蓬莱島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相当に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稲荷神社ではなく大沼の島居の立つ「弁天島（出島）」（写真）が起点となっている。

大沼浮島は、全国に散らばる浮島神社の総本宮ではないか。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫（瀬織津姫）が祀られているのも本来はこの分社だったのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になると思われる。



●私はここ 2 年間で 3 度、東京出張の折に大手町の将門塚を訪ねている。なぜか惹かれてしまい東京駅に降り立つとせっかくだからと歩いてしまうのである。ここにあった神明明神にも参拝した。そして、この祭祀線を見つけた朝は鶴岡市にいた。羽黒山はすぐ近くにある。将門さんに招かれた気がして、いても立ってもいられなくなってしまった。ちょうどホテルの近くには「化けもの祭り」で有名な鶴岡天満宮があったので、まずは道真さんに挨拶して出かけることにした。実は、前日に泊まった酒田のホテルロビーには、手作りの道真さんの人形が賽銭箱とともに飾ってあったのだ。益々気持ちは高揚してきた。



将門塚



ホテルの道真さん



絵馬のかっこいい道真さん

●鶴岡天満宮の境内は広く、拝殿は正面が 8 間、本殿が 3 間、参道には 2 間の境内社が三つあった。大谷天満宮は、きっと間違えて逆に書かれたのだと思うが拝殿が 2.5 間と狭く、本殿が大きく 6 間と記録されている。鶴岡天満宮より 2 間ほど小さいが、大谷天満宮には 1 間の境内社が九つ、さらには神楽殿まであった。きっと同じような規模だったと言える。あの小さな町の小さな集落に存在していたことが不思議でならない。

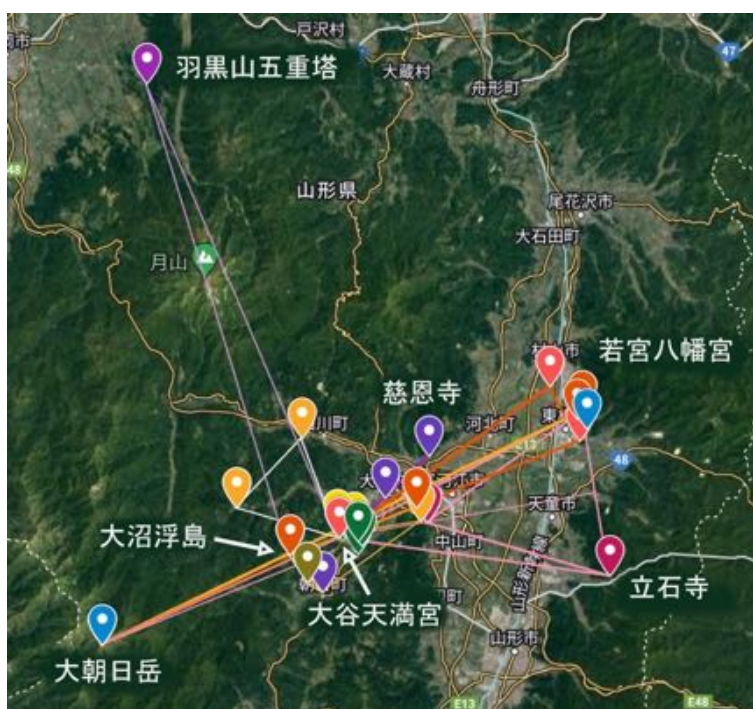


■鶴岡天満宮

祭神は菅原道真。旧県社。勧請の時期は不明。近世にはおもに天満宮とよばれ、天神町の東端に位置していた。最上氏時代には鶴ヶ岡城内西御門脇にあり、酒井氏入部後五日いつか町北方に移転、さらに宝永二年（一七〇五）天神町へ移ったなどとする由来記があるが、誤りが多いとされる（大泉掌故）。元和八年（一六二二）の庄内寺社領目録では、島村に天神領八石余があり、おそらく慶長一七年（一六一二）最上義光により社領寄進の黒印状を与えられていたと推定される。鶴岡市神明町 3-4 0

るが、ここは最も低い谷と呼ばれる場所だ。ここには、大杉のご神木が現れた。樹齢 1000 年を越える大杉や松保の大杉も 1000 年以上とさう古く、五重塔も建てられたことを信じる。大杉の根元は半透明なシートで覆われていた。その裏に、ご神木が隠れていた。この祭祀線に気づかせているのだと思う。それまでに将門さんがこの山に、この聖地の神気をどう使おうとしたのか。

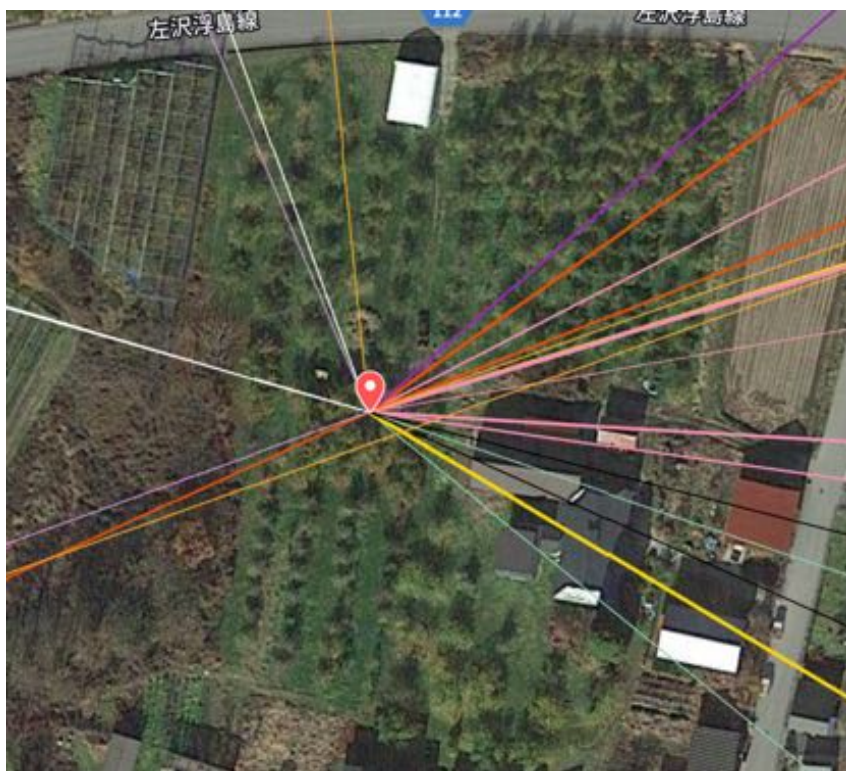
A photograph of a large, ancient tree trunk in a forest. The tree is very tall and has a thick, textured bark. At its base, there is a small, simple wooden structure, possibly a shrine or a marker. The forest floor is covered with green grass and other vegetation. The background shows more trees and a hazy sky.



●まとめ

平将門に怨霊菅原道真が生まれ変わり、あるいは乗り移って「将門の乱」は起こったとされている。年貢の量を減らすなどして民の暮らしを護った優しい人柄であり、逆に朝廷に反骨心を燃やしている熱い人だった。藤原家支配の日本の流れを変えたかったのだろう。大谷天満宮本殿の位置を探すための調査だったが、最後に二人の熱い思いが伝わってきたような大きな調査となった。それは大谷天満宮が「将門の乱」において、当時大きな働きをしていたことの裏付けになる。改めて平将門を学び、関わる祭祀線を現したいと思っている。

まさに、大谷天満宮本殿跡地はここで間違いない。



(令和 5 年 9 月記)